

2006年5月31日
ブラジル日本商工会議所
名誉会頭 工藤 章

下院外交・防衛委員会 日・伯経済セミナー講演原稿

テーマ：日本経済界のブラジルに対する見方（何故投資が伸びないか、今後の方向性）

はじめに

本日は「下院外交・防衛委員会 日・伯経済セミナー」にお招き頂き有難うございました。また、講演の機会を与えて頂いたことに対し、厚く御礼申し上げます。

さて、本日は日本経済界のブラジルに対する見方について、お話しをさせて頂きたいと思いますが、私自身のブラジルとの係わりを振り返りながら日伯の歴史に触れてみたいと思います。

70年代

三菱商事に入社したての時代で日本も高度成長期でしたが、産業は公害の対応に追われ関連の設備投資が盛んな時期でした。隣のチームがブラジル向けのプラント輸出を手がけているところでしたが、毎日夜遅くまで入札の準備に追われていました。連日の入札の結果に一喜一憂していましたが、霧のため国内便が飛ばなかった為、入札締め切りに書類を提出出来ずに失格になって涙を呑んだこともありました。その隣のチームの同僚にブラジルの話を聞いて、いつかそのすばらしいブラジルに行きたいと思っていました。

80年代-90年代

中南米の仕事に携わっていましたが、累積債務問題から始まった「失われた10年」の間は中南米でのビジネスも激減した為に、中近東のビジネスに回されました。イランのホテルで多くのブラジル人、矢張り地元でのビジネスを失った方達、と知り合うことになりましたが、お酒の代わりにお茶で早く中南米が復興するように願ったものです。

90年代に入って日本からのファイナンスに依るグアナバラ湾の清浄化プロジェクトに関係しました。リアル・プランが始まる頃でしたが、ブラジルの活気を感じました。然しながら、バブル経済崩壊の影響をまともに受けた日本企業が元気を無くしており、ブラジルでのビジネスのチャンスに参画できない状態で、非常に寂しい思いを致しました。

21世紀 / 中国の登場

今世紀に入って始めて私自身にとっても大きな出来事は、ルラ大統領の訪中ミッションに加わり中国を訪問したことです。中国の変貌はもとより、大統領に同行された500人を超える経済界の代表の方々のエネルギーに驚きました。

ここで日本、ブラジル、中国間の経済関係の現状を簡単に整理したいと思います。

94年から04年の間に日中貿易は実に460億ドルから、1680億ドルと3.7倍に拡大していますが、特に日本から中国を見ると、**2004年の中国との貿易額は1680億ドル、シェアにして16.5%**（ジェットロ統計）となり、香港を含めると、シェアは20.1%と2割を超え、財務省が統計を取り始めた47年以降、初めて米国を抜いたこととなります。また投資額も極めて大きく、**日本から中国への投資は、契約ベースで92億ドル、実行ベースで55億ドル（シェア9%）**となっております。急増する日本から中国への投資の55.7%は中国国内市場を目的としたもので、34%は中国で組立てた製品の輸出を目指したものとなっておりますが、中国は日本にとって重要な市場であるとともに、日本企業の輸出基地としての存在価値も大きくなっていることがここに現れています。

日本とブラジル（中国と過去の問題の影響）

一方のブラジルについては、先程申し上げた通り、21世紀に入って安定した経済成長を維持しており、レアル・プランによる国営企業民営化の影響などもあって、90年代後半はブラジルへの直接投資も大きく伸びています。

しかし乍ら、日本企業からの投資は依然として伸び悩んだ状態にありますが、これは、先程申し上げた通り、日本企業の目が中国を向いているという背景があると思います。また、ブラジル経済が良くなっていることは判っているけれども、80年代の苦い経験、即ち累積債務問題の記憶等が蘇るということもあり、中国で手一杯となっている現状を転換して、ブラジルに目を向けるところまで行っていないというのが、偽らざる現状でしょう。

ブラジル自身の問題

また、ブラジルへの投資が伸びないのは、ブラジル自身の問題も少なからずあるかと思えます。90年代の投資が大幅に伸びた要因は、規制緩和と民営化という二つの特別なファクターを抜きにしては語れませんが、実際のブラジルは、率直に言って、今のままでは、中国ほど魅力的な投資先とは言えないと思います。詳しくは後の発表者に説明を譲りますが、「ブラジル・コスト」の問題があるからです。一般にブラジル・コストとは、輸送インフラの未整備、通関手続きの煩雑さ・ストライキ、複雑で高率な税制、労働者を過剰に保護する労働法、高金利、為替市場の未整備、為替リスクなどが挙げられますが、どれも企業が投資を検討するに当たり、問題となることばかりです。もちろんこのブラジル・コストは、日本企業に対してだけかかって来る訳ではなく、欧米企業も条件は基本的に同じですので、日本からの投資が少ないことを証明する十分条件ではありませんが、ブラジル経済が安定しても、こういった問題は引続き存在して

いるのだということを敢えて指摘しておきたいと思います。

今後の突破口について

今後、日本企業の目がブラジルに向くためには、その突破口になるものが必要と思います。BRICsとして世界の注目が集まるブラジルですから、日本を含めた世界が投資を拡大するポテンシャルはいろいろな分野にあると思います。特にふたつ、高いポテンシャルのある分野を挙げますと、一つに環境・新エネルギー分野、二つに高度な産業・ハイテク分野が、将来のキーになると考えています。

環境・新エネルギー分野

まずエネルギー分野の一例として、エタノールを挙げたいと思います。

今日この場でブラジルのエタノールの競争力を改めてご説明することは致しませんが、エタノールビジネスの可能性について少しお話ししたいと思います。

2004年の数字でお話しますと、ブラジルに於けるエタノール需要は、国内販売が1320万KL、輸出が240万KLとなっています。日本向けの輸出を見ますと、現状では飲料用、工業用を合わせた日本の輸入量の約70%がブラジルからと、その大半を占めております。また、燃料用エタノールの輸入についても、その実現に向けて様々な検討・テストが行われております。日本のガソリン需要は年間60百万KLといわれていますが、E3レベルでのエタノール直接混入、即ちガソリンへの3%のエタノール混入や、エタノールを約45%使用するETBEとしての導入が検討されるなど、今後の可能性は高まりつつあります。ブラジルのエタノールは海外向け輸出の販路も徐々に開拓されつつありますが、このように日本へのエタノール輸出も今後ますます拡大していくことが見込まれており、日本企業やブラジル企業にとってのビジネスチャンスが存在することは申すまでもないと思います。

但し、日本は全てのエネルギーを海外からの輸入に依存しています。従って、安定供給が最も重要なファクターであることを十分に認識して頂きたいと思います。

エタノールはあくまでも両国経済関係活性化の一例に過ぎませんが、一ビジネスマンとして、両国間のFTA(EPA)の締結も視野に入れつつ、今後のブラジルでの経済活動に力を入れていきたいと思っています。

また、環境分野の一例としては、CDM(クリーン開発メカニズム)が挙げられるでしょう。ブラジルはDNAと呼ばれるCDMの案件承認機関がいち早く設立された国がありますが、排出権取引市場についてもロンドン、シカゴに次いで設立される予定になっています。この取引市場が設立されれば、そもそも企業間の相対で動いていた排出権の取引に透明性や公平性が持ち込まれ、CDMの取引がどんどん活発化していくとともに、海外の投資家の注目がブラジルの案件に引きつけられることが期待されます。現時点で

ブラジルは登録案件や、申請・審査中案件も中南米では勿論一番の数になりますが、世界で見てもアジア(この大半はインドですが)と並んで多く、この数は今後も伸びていくと見られます。このように、ブラジルは CDM に関しては非常に有望な国であると言えます。

高度な産業・ハイテク分野

また、ハイテク分野に関しても、今後成長の余地が大きく残されていることから、投資先としてのポテンシャルは非常に高いと思います。例えば、現在最終的な議論がなされつつあることと思いますが、デジタル TV など今後のブラジル向け投資のカギを握る大きなファクターと見ています。当社の専門分野ではございませんので詳しいことは割愛させていただきますが、4月にブラジルの閣僚が日本を訪問し、デジタルテレビ方式導入に関する覚書を結んでいますので、あとは政府の決定を待つのみとなっています。また欧州勢が巻き返しを図っているようですが、一旦規格の導入が確定すれば、半導体工場の設立を含め、新たな設備投資と、それに伴う日本からの投資の拡大が期待されるでしょう。また、デジタル TV の導入によりコンテンツの拡充などソフト面の投資拡大も期待できると思います。

但し、産業の高度化のためには、裾野の産業の充実が重要と思います。単純に、生産拠点をブラジルに持って来るのではなく、技術者の育成や関連の中小企業の育成が必要であり、この点を日伯が広く協力していく必要があると思います。

民間企業として

民間企業としては、日伯両国のビジネスの交流を促進するためにも、多くのブラジル理解者を増やすなどできることをどんどんやっていきたいと思っています。しかし、繰り返しになりますが、ここでブラジル側に残っている投資障壁は極力取り除くべきです。「ブラジル・コスト」という言葉が存在するうちは、過去の累積債務問題のトラウマが残っている日本にとって、ブラジルは距離的に遠くて経済的にも遠い国のままで終わってしまいかねません。

最後に

最後になりますが、来月行われるサッカーの世界カップでは、日本とブラジルは幸か不幸か同じグループに入っています。また皆さんご存知の通り、日本の代表監督はブラジル人のジーコです。経済のみならず、サッカーにおいても、両国の前向きな交流を図っていきたいものです。世界カップでのブラジル代表の活躍を祈り、私の講演を終わりたいと思います。

以 上